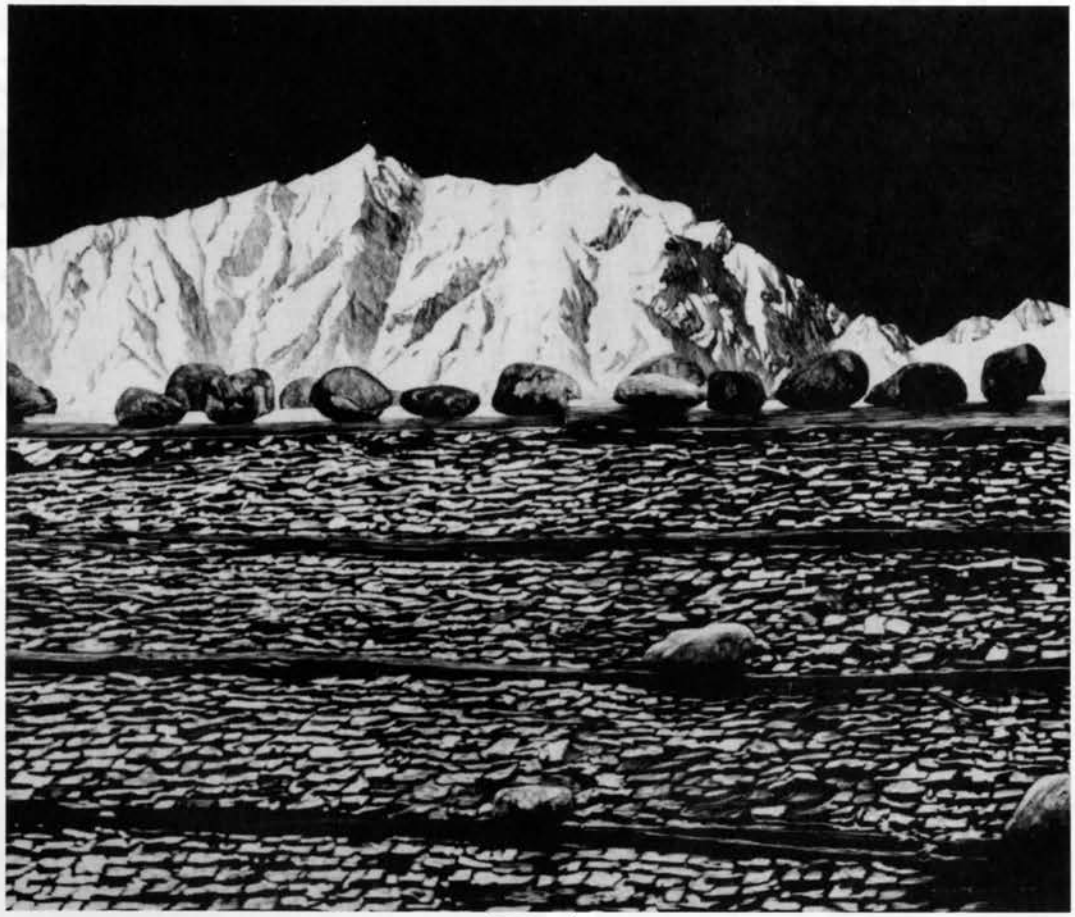
山と博物館

第38巻 第7号 1993年7月25日 大町山岳博物館

特集 「齊藤清 展」 7/18～8/22



板屋の春

「斉藤清展」によせて

斉藤清さんは、れっきとした大町市の住人である。

大町の斉藤さんは、会津に住む著名な版画家の斉藤清氏と良く間違えられる。

それもそのはず、おふた方は同姓同名なのである。

また、このお二人に共通しているのは双方とも、木を素材として作品を生み出していることである。

大町の斉藤さんの作品は、斉藤さんが独自に編み出した手法で作品が生み出される。

この手法での作品は、会津の斉藤さんの版画が何枚かの作品を刷り出すことができるのとは違い、オリジナルは一点のみである。

作品は繊細な線によって成り立って行く。細かく、孤独な仕事だけに当然ストレスも多い。

本人はストレス解消のためと称して、よく酒を飲む。

だが、一人で酒をチビチビといった飲み方はできない。何人かの仲間と飲みたいのである。

ストレス解消にカコつけてはいるが、本当は寂しがり屋なのである。

信州上田で木彫の修業をした後、大町で制作を始めたころは、まだ無名の作家で貧乏をしていた。

住居兼仕事場の裏長屋で生活をしていたころ、長屋の前にある池で飼っている大家の金魚が、だんだん少なくなっていったのは、その頃の斉藤さんの生活状況を物語るひとつの逸話でもある。

貧しい生活の中でも斉藤さんの部屋には、いつも何種類かの草花が生けられていた。

そんなところにも斉藤さんの心優しさがにじみ出ていた。

斉藤さんの作品に「心のふるさと」の暖かさと、優しさを感じるのは、そんな思いがあるからなのだろうか。

「斉藤清の世界」をより多くの方々にご覧いただきたいと願っている。

（大町山岳博物館 館長 千葉彬司）

〝板絵〟のコスモロジー

扇田孝之

画集『やままゆ』が生まれた夜

昨年の五月、斉藤さんと僕は借馬（かるま）（大町市の北部）にある焼肉屋にいた。いつものようにビールで乾杯して、日本酒に移ったころである。ふと、斉藤さんの口調が変わった。

「実は、前にも言ったかもしれないがね、俺の画集が出るのが本決まりになってね。それで、その画集に文章を書いてもらいたいんだよ」と言う。

「斉藤さん、文章を書くといったってね、僕は絵にはまったくの素人。斉藤さんの絵の解説なんて書けるわけがないでしょう」と、あわてた僕が言う。

「そこなんだ。俺は何も、この絵はしかじかの構図で、あづみ野の詩情と融けこみ…、などというしゃらくさい解説を書いてもらおうなんてハナから考えてないよ。

それにね、どこかの偉い先生にお願いして斉藤クンは苦節何年、日ごろの精進が花開き云々、なんていうのも背筋が寒くなる」と、言いながらコップの酒を飲みほす。

「大町に生まれ育った俺は、そこから見えてきた〝今〟を絵にする。同じように、東京で育ち、大町に移住してきたお前さんの眼で〝今〟を文章にする。

二人には、大町・あづみ野を生活拠点にしている以外に共通するものはなにもない。でも、それだけで十分。事前にこんなようなものができますなんて、わかっちゃったら面白くもなんともないよ。とにかく、俺はどっからみても〝画集〟ですというのだけはつくりたくないんだ」。

悪戯坊主のような人なつっこい笑顔が、肉を焼く煙の向こうから迫ってきた。

伝統からの蝉脱（せんだつ）

斉藤さんと〝木〟との本格的な出会いは上田の農民美術研修所である。そこで三年間の修業の後、上京。「すごい刺激だった。いろんな人がいて、絵画ひとつにもたくさんの技法があり、とにかく世間の広さ、深さみたいなことを学んだような気がするね」。

昭和三十九年、長男の斉藤さんは、父親の病気をきっかけに大町に戻ってきた。以後、大町を離れたことはない。おりしも、同じ年に黒四ダムが完成、同四十六年、立山ルートの全通、更に相次ぐスキー場の開発に乗って大町にも観光の大波が押し寄せてきた。

斉藤さんがつくる木彫りも信州〝らしさ〟が受けて人気をよび、生活もようやく楽になってきた。しかし、決まり切ったデザインと手法、ただ機械的につくるだけで制作の苦労はない。何かが違ってきている、得体のしれない苛立ちがつのっていた。

そんな時だった、知人の出版物に木版画のカットを描いてくれないかという話がきた。昭和五十三年である。数十点の作品は知人の期待に応えるできばえであった。

それとは別に、斉藤さんは山と積まれていく版木を見ながら、密かではあるが、確かな手応えを感じていた。木版画は転写されて初めて作品となるが、この版木そのものが作品になるかもしれないと。

これまでの既成概念を捨てて、木の表面に木版、銅版、石版などのありとあらゆる技法を試し、線と面との陰影がおりなす繊細な雰囲気を表現してみたという。そこで、生まれたのがモノクロームを基調とした〝板絵〟という独創的な手法であった。

〝板絵〟の誕生、それは、京の古代紫に対する新興都市・江戸の紫＝今紫の誕生とでもいえようか。

春田

モノクローム・多彩と豊穣

僕の子供時代は写真、映画、そしてテレビとモノクローム全盛の時代で、現実の世界と絵の世界だけに色があった。そんな時代に育ったからであろうか、本物らしく描くには、現実の世界にあるだけの色が必要なんだという思いがどうしてもぬぐえなかった。

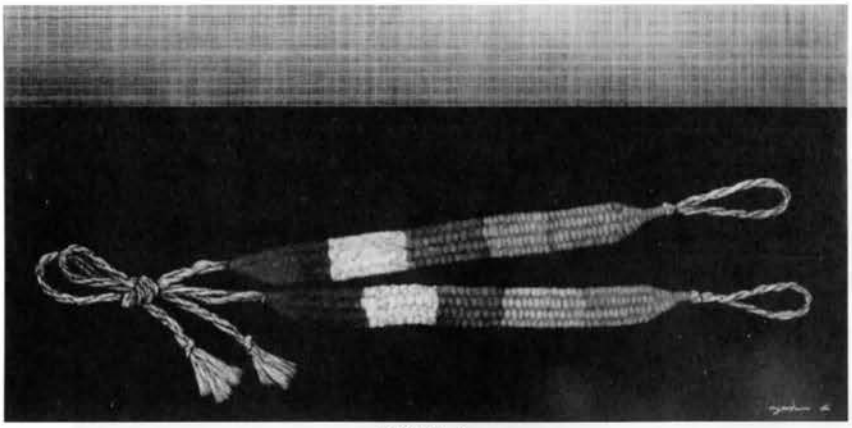
モノクロームだからこそ広がる豊かな世界があると気づかされたのは英国の女流画家、ブリジット・ライリーの作品である。

もう十年以上も前になるだろうか、東京で行われていたイギリスの現代絵画を中心にした展覧会になにげなく入ったことがある。

展示作品にしたがって、少しづつ移動していると、視覚を妙にくすぐる刺激を感じた。いぶかしく思いながら刺激の方に顔を向ける

と、いきなり体全体がゆれるような感覚にとらわれた。

大きな窓枠くらいのカンバスに白と黒の曲線が踊っている。その曲線は一定の決まりのなかで緩やかに、あるいは急なカーブを描いている。線や図形を厳密で精密な規則に従って描くことによって生まれる輝き、その輝きから発せられる色彩と複雑かつ微妙な動きと立体感。僕は、ライリーが描いたモノクロームの多彩な世界に圧倒されていた。それから



れんじゃく

数年後、〝板絵〟との出会いがモノクロームの醸しだす豊穣を教えてくれた。

北アルプスとそれにつづく前山。あづみ野は人間の想像—創造をはるかに越える豊潤な色彩に溢れている。しかも、時々刻々、四季折々に千変万化する。変化の時間がゆったりとしている建物や道具。しかし、それを見つめる人たちの感慨は様々である。

精彩に富んだ自然、多様な心模様を一瞬のうちにすくいとるには、モノクロームがふさわしい。斉藤さんは、「作家は自分のメッセージをちょっとお示しする。イメージの一部でも届けば十分なんで、あとは受手の感性や感覚におまかせ」という言い方で、モノクロームの豊穣を表現する。

〝板絵〟は、あづみ野という土地を離れては決して生まれてこなかったのである。

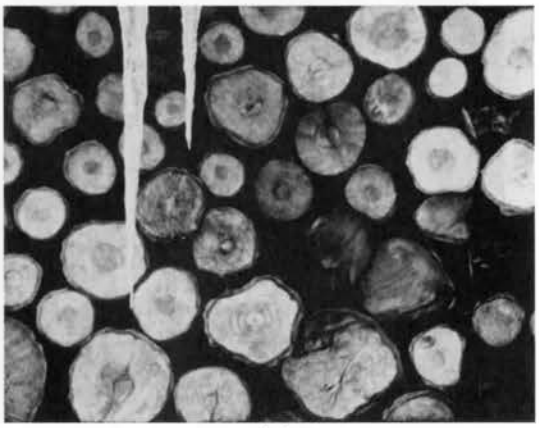
必然の成果

前山の緑も稜線までとどいた今年の五月下旬、僕と斉藤さんはあの焼肉屋にいた。

「去年の今ごろから、丸善で始まる十一月まで本当に怖かった。本は売れない、個展の評価はベケじゃ、全部終わりだもの」。この半年間を振り返るように、少し遠くに視線を合わせながら、くいっと杯を空けた。

これまで、斉藤さんが行なった個展の多くは、交際範囲の域にとどまるもので、作家活動を左右するような場ではなかった。

しかし、今回は違う。〝画集『やままゆ』出版記念・斉藤清の世界展〟と銘打って、画商がプロデュースし、東京日本橋の丸善本店をかわきりに、丸善仙台店、三越名古屋栄本店、そごう神戸三の宮店、最後が前橋市の煥呼堂。いずれも一流の会場である。半年の間で、否応無く〝作家〟としての評価が決まってしまう。



つらら

先の会場のいくつかから、個展を定期化したいという話がきた。この秋からは、東京の三越、そごう横浜店での個展が待っている。新たな出発が〝山博〟から始まったのだ。

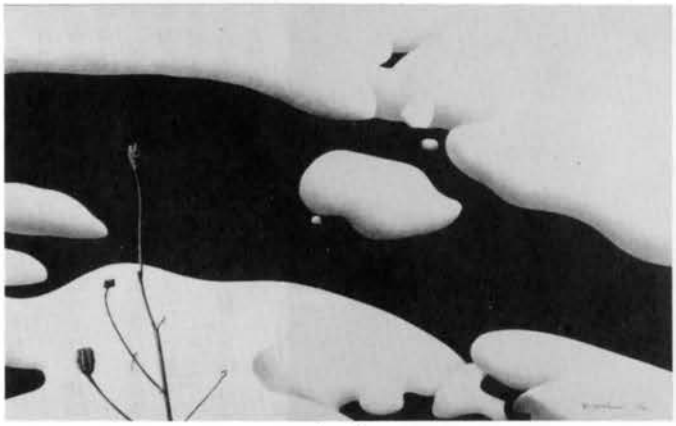
もう一つ嬉しいことがあった。

地元の友人、知人たちが中心になって『やままゆ』の出版を祝ってくれた。無名時代から作品を買ってくれた人、成長していく斉藤さんを心から喜んでくれる人たちだけが集まり、義理や主催者の見栄で招かれたゲストが唯一の人もいなかったからだ。

ところで、〝地元に残る〟という言い方がある。地域内で少々名のでた文化人や作家と称する人たちが好んで口にする言葉である。しかし、そう言う人たちの多くは、〝中央〟での闘いを回避し、居心地の良い〝地元〟に留まっているだけなのである。そういう人ほど、〝中央〟でも着実に業績をあげていく者を冷ややかに見つめたり、ことさら無視する態度をとる。それは自分と同じ位置にいる、あるいは指導下にあると思っていた人間が、遥か手の届かないところにいると気づいた時の嫉妬や狼狽なのである。

斉藤清さんは、〝地元に残って欲しい人〟になった。

（地域社会研究家　フリー・コーディネーター）

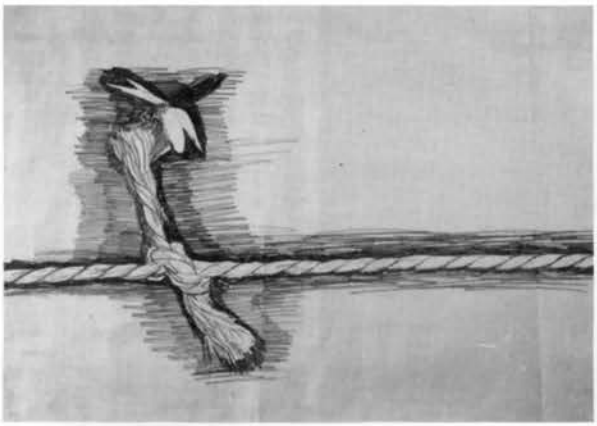


冬川

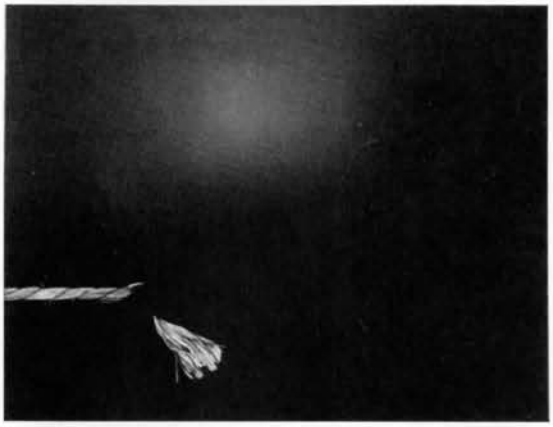
板絵の製作過程

板の上にまず白い絵の具を全面に塗り、その上から必要な色を重ねていって各色の層を作ります。そして、その上を黒で被います。塗った塗料が乾いた後、原画を転写し、ピアノ線などさまざまな自作の道具を使って出したい色の層まで削っていき、ものの形を浮かび上がらせます。

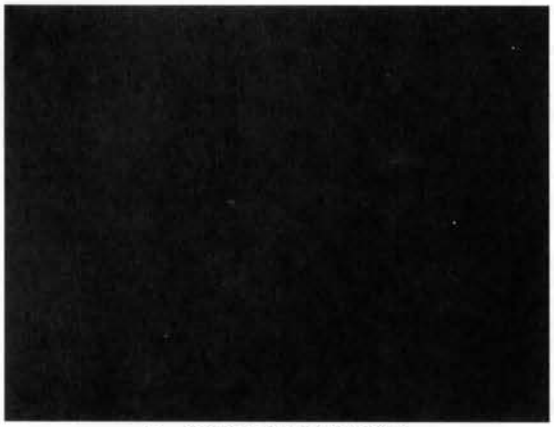
普通の絵のように色を加えるのではなく削るのです。ですから一度削ったところはやり直しがきかず、非常に神経を使う技法です。



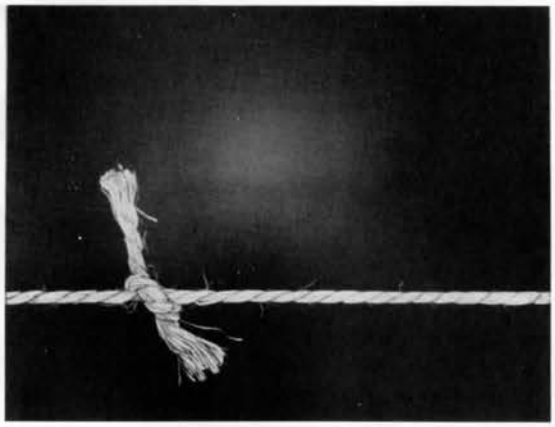
1．原画を描く（トンボの胴体は赤く色づけしてある）



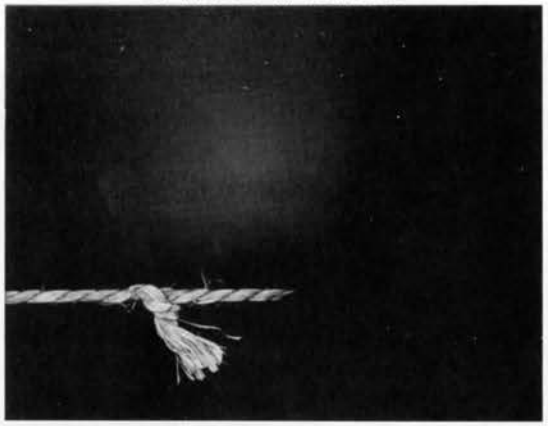
3．縄をはじから削り出す



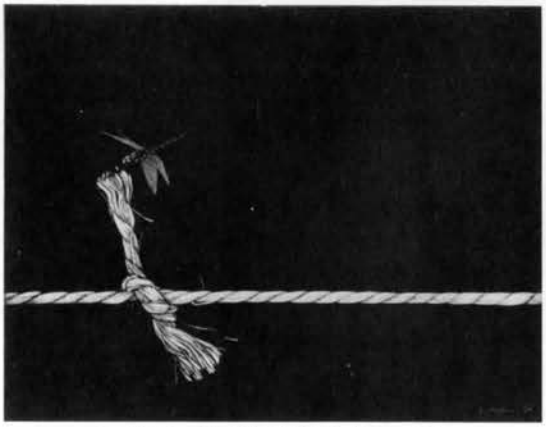
2．原画の上に黒の塗料を塗る



5．縄の全体が削り出される



4．縄をさらに削り出す



6．赤トンボを削りだし完成（赤とんぼ）

山と博物館第38巻第7号
一九九三年七月二十五日発行
発行所　〒388長野県大町市　TEL㉒〇二一一
大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町
大糸タイムス印刷部
定価　年額　一、二三〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一二三九三）